

最近、私はずっと悩んでいます。それは、「本当の自分って何？」ということです。

誰にも嫌われたくないから、自分をつくってしまうんです。例えば、クラスの中心の〇〇といようと、話を合わせるために、おしゃれな私を演じようとしています。遊びに行く時は、メイクだっとうまくできます。

そして、部活は好きです。だから、部活の仲間に嫌われないようにしています。教室で〇〇という時とは全く別人です。

ほんとうは、メイクもせず、おしゃれもしないでいるほうが楽なんです。誰の目も気にしない時は、本当に楽しいです。

でも、誰かの目を気にして、その場の自分を演じることばかりで疲れてしまいます。浮かないように、他人から嫌われないようにしてばかりで、向き合う人や場が違えば、全く違う自分になっている……。

本当の私とは何なのか、すごく悩んでいます。アドバイス、よろしくお願いします。



挿画：田淵正敏

- ① もし、自分がラジオ番組のパロディライターだったとして、次の文章のような投稿があったら、どのようにコメントしますか。考えてみよう。
- ② 書いたコメントを読み合い、自分が投稿者だったら納得できると思えるものを選んでみよう。

学習活動

- 1 「友達プレッシャー」とはどのようなことか。まとめよう。
- 2 「同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことではないか」(22・1)と言えるのはなぜか、説明しよう。

要旨 若者に友達プレッシャー

辻大介

現在の日本の若者たちは、常に自分に向けられるピア・グループ(同輩集団)からの視線を恐れている。人間関係への敏感な気づかいを迫られ、その敏感さゆえに過度なまでの友達プレッシャーに苛まされている。「便所飯」はその典型であり、人目を気にする伝統的な日本社会のあり方が、物質的豊かさが達成されて人間関係にシフトしたためである。今彼らに必要なのは、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことだ。

◎第一段(「便所飯」という言葉)

「便所飯」という言葉をご存じだろうか。昼休みに一緒に食事する相手のいない学生が、ひとりである姿を周囲に見られないよう、トイレの個室にこもって食事を取る。そのことを指した若者言葉だ。真実か虚偽うそかという具合。真偽のほどの疑わしい都市伝説とみなす向きもあるが、どうやら本当にある話のようなのだ。「そこまでしようとは思わないけど、気持ちはわかる」という学生も少なくない。「大学でひとりで食事するなんて、友達のいない寂しい人に見られそうでも耐えられない。周りに友達が見えたらならないときでも、ケータイを使って、一緒に食べる相手を絶対つかまえる」のだという。

「便所飯」という言葉をご存じだろうか。昼休みに一緒に食事する相手のいない学生が、ひとりである姿を周囲に見られないよう、トイレの個室にこもって食事を取る。そのことを指した若者言葉だ。真実か虚偽うそかという具合。真偽のほどの疑わしい都市伝説とみなす向きもあるが、どうやら本当にある話のようなのだ。「そこまでしようとは思わないけど、気持ちはわかる」という学生も少なくない。「大学でひとりで食事するなんて、友達のいない寂しい人に見られそうでも耐えられない。周りに友達が見えたらならないときでも、ケータイを

使って、一緒に食べる相手を絶対つかまえる」のだという。

* 語句
真偽のほど

◎第二段(人間関係に神経をつかう若者たち)
 かといって、常に友達といないと不安になるわけではない。例えば「大学から離れた街中の飲食店であれば、一人で食べるのも苦にならない」らしい。私が昨年十月に、二十〜四十代の男女約千人を対象に行った人間関係に関する意識調査でも、二十〜二十四歳の若年層で「一人で部屋にいたり食事したりするのは耐えられない」と答えた者は十六パーセントにすぎなかった。一方、「周りから友達がいないように見られるのは耐えられない」という回答は四十三パーセントに達し、より上の年齢層に比べても高い割合を示している。若者たちが恐れているのは、一人であること自体よりむしろ、そこに向けられるピア・グループ(同輩集団)^①の視線なのである。

その視線のプレッシャーの中で、彼ら彼女らは人間関係にかなり神経をつかってきている。調査データを分析してみると、「友達がいないように見られるのは耐えられない」者は、「自分のふるまいが場違いではないか」と気をつけ、「何かするときには人の目を考慮」し、「友達と意見が食い違ったら、相手に話を合わせる」傾向が強い。敏感に「その場の雰囲気から状況を推察する。特に、その場で自分が何をすべきかすべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断する」こと。また、「空気を読む」と言いかえてもいいだろう。また、「友達のメールにはすぐ返信」するようになっている。「電波の届かないところにいると、なんとなく落ち着か」なくなりがちだ。

① 同輩 年齢・経歴・地位などの同じ者。

断すること。

◎第三段(問題は過度な友達プレッシャー)
 こうした人間関係への敏感な気づきは、それじたいが悪いことであるわけではない。「友達がいないように見られるのは耐えられない」者は、募金やボランティア活動への参加に積極的であったことも付記しておきたい。これもまた、他者への気づかいの現れの一つだろう。問題は、その敏感さゆえに、過度なまでの友達プレッシャーがはたらきかねないことにある。

なぜこのようなプレッシャーが強くなるようになったのか。人目を気にすること自体は、以前から日本社会の特徴とされてきたことだ。例えば高度経済成長期には「人なみに車くらい持っていないと恥ずかしい」というように、物質的な面において人目が意識されてきた。しかし物質的な豊かさが達成されると、生活の満足度や幸福感はより身近な人間関係に左右されるようになる。意識の向かう先が人間関係にシフトするのだ。

その意識は、特に高校までの間は、学級を中心とした同輩集団の中に閉ざされ、苛烈な友達プレッシャーと化す。限られた関係の中で友達を作らねばならず、それに失敗した者は、孤独だけでなく、「友達のいない変な人」という烙印の視線にも、耐え続けなければならぬ。二重の意味で疎外されるのである。その視線から逃れる場所は、そこそとイレの個室くらいしか残されていない。

人間関係からの避難場所。

友達がいなくて人間関係から疎外されるだけでなく、「友達のいない変な人」という視線にさらされることで、さらに疎外されてしまっていること。

② 高度経済成長期 主に一九五〇年代半ばから一九七三年までの期間。

③ 二重の意味で疎外される」とはどういうことか。

* 語句
 場違い

傾向 注目 日頃

読解するために

要約・要旨

目的に応じて情報を処理・整理するための方法の一つとして、「要約」や「要旨をまとめる」作業がある。「要約」は、文章や話の要点を短くまとめ、わかりやすく表すことであり、文章の構成の通りに、筋道を立てて説明を行うのが「要約」である。

「要約」を行うには、まず文章や話の構成を捉えることが重要になる。そして、まとまりごとの要点、つまり、書き手や話し手が最も伝えたいポイントを見つけることが求められる。次に、要点を整理して、要点どうしがどういう関係になっているかを考えながらつなぎ合わせていく。要点をつなぎ合わせる際には、必要に応じて、もとの文章や話にはない言葉を補ったり、別の言葉で言い換えたりすることも必要になる。

注意してほしいのは、「要約」と「要旨」は異なるということだ。「要旨」は、書き手や話し手の主張や言いたいことを中心にして必要な説明を加えて文章に表したものとまとめることができる。

15

10

5

要約例

若者は、友達のいない寂しい人に見られたくないらしいが、常に友達といたくないと不安になるわけではなく、一人でいると見られることが嫌だということのようだ。こうした若者は、人間関係にかなり神経をつかっており、「人の目を気にかけ」「相手に話を合わせる」「傾向が強い」傾向が強いのが特徴である。人間関係に対する気遣い自体は悪いことではない。むしろ、過度に友達プレッシャーがはたらきかねないことが問題なのだ。

段落ごとの要点

若者は、友達のいない寂しい人に見られたくない。
常には友達といたいと思われたいが、嫌。
こうした若者は人間関係にかなり神経を遣っており、「人の目を気にかけ」「相手に話を合わせる」傾向が強い。
人間関係の気遣い自体は悪いことではなく、問題は過度なまでに友達プレッシャーがはたらきかねないこと。



要約の目的や字数、伝える相手などを考えて文章にまとめる。

- 言葉を書き換える。
● 言葉を書き足す。
● 順序を入れ替える。

文章を読み、構成を捉える。
「序論」「本論」「結論」
「問い」と「答え・まとめ」など

「結論」や「まとめ」などにつながる大事な言葉や文を抜き出して並べる。

読み直して文章を整える。

情報を整理するために

● 筆者が行った「人間関係に関する意識調査」(20・3)からどのようなことが得られたかをまとめ、話し合ってみよう。



(朝日新聞社提供)

辻大介 つじだいすけ

一九六五(昭和四〇)年。社会学者。大阪府の生まれ。共著に『コミュニケーション論をつかむ』などがある。本文は「朝日新聞」(二〇〇八年八月三十日夕刊)によった。

◎ 第四段(若者に必要なこと)
今、必要なのは、子どもたち若者たちが、同輩集団以外の多様な関係を取り結べる環境を整えていくことではないか。同年代の友達でなくとも、人に認められ必要とされる関係はある。その相手は一人暮らしのお年寄りかもしれないし、長期入院の子どもかもしれない。社会は広い。そこにはトイレの個室に代わる居場所が、誰にとっても必ずあるはずだ。

同輩集団からの苛烈な「友だちプレッシャー」から逃れ、それ以外の集団と多様な関係を取り結べる場所のこと。

▼ 「トイレの個室に代わる居場所」とはどのようなものか。

以外 注意外

5